

## 第128回 三方限古典塾（'17, 6, 15）

### 呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その1）

1 暮夜無知の四字は、百悪の総根なり。人の罪は欺くより大なるはなし。欺く者は其の無知を利するなり。大姦大盜は皆無知の心によりて之を充たす。天下の大悪只二種あり。無知を欺くと、有知を畏れざるとなり。無知を欺くは還て是れ忌憚の心あり。此れ誠偽の関。有知を畏れざるは是れ箇の忌憚の心も無きなり。此れ死生の関。猶畏るる有るを知るは良心尙未だ死せざればなり。（存心）

（意識） 「暮夜知る無し」の四字は諸悪の根源である。人の罪は他者を欺くより大きいものはない。欺く者は人の無知を利用している。大悪人は人の無知に乗じて悪事を拡充していく。天下の大悪人には二種類ある。知られないことで欺く場合と、知られることを恐れない場合である。知る無きを欺くというのは、まだどこかに「忌み憚る」という良心がある。この忌み憚る心が誠と偽と分かれる関門である。ところが「知る有るを畏れない」というのは忌憚の心もない。これは死と生との関門である。まだ人に知られては困るという間は良心が死にきっていないからである。

（余説） 「暮夜知る無し」は後漢末の政治家で関西の孔子といわれた「楊震」（54～124）の故事です。支配地の巡察の時、賄賂を贈ろうとする者に対して断ると「夜で誰も見ておりません」と勧めるので、楊震は「天知る、神知る、我知る、子知る」と言って誠めました。これを楊震の「四知」と言い「暮夜無知」と共に有名な故事です。

一方、知られることも畏れないのは、人間にとって最も大切な「敬恥」（慎み羞じる）の心を失った徹底した悪党であり、まさに人として「死」です。最近、日本や海外でそのような開き直りが感じられることがあり、その害毒は計り知れないものがあります。

2 当然あり、自然あり、偶然あり。君子は其の当然を尽し、其の自然に聴せ、而して偶然に惑わず。小人は偶然に泥み、其の自然に払って、而して其の当然を棄つ。噫偶然なるもの得べからず。其の当然なるものを併せて之を失う。哀しむべきなり。（應務）

（意識） この世の中には、当然なこと、自然なこと、偶然のことがある。君子は当然なことには精一杯に尽くし、自然なことはそれに任せ、偶然に起きたことには惑わされない。一方、小人は偶然のことにこだわり、自然の理に逆らって、当然のことを見落とす。

偶然の結果のものごとを決して手にしてはならない。そうでないと当然なものごとをも併せて失うことになる。それは哀しむべきことである。

（余説） 自然のなかには、必然あるいは当然ということがあります。自然についての知識が足りないと、当然のことを偶然と錯覚して棄ててしまいます。またたまたまの偶然なのに当然と錯覚してこだわることもあり、要注意です。

先月まで学んだ「南洲翁遺訓」の「世人の唱ふる機會とは、多くは僥倖の仕當てたるを言ふ。真の機會とは、理を尽して行ひ、勢を審かにして動くこと云ふに在り。」も偶然に泥むことを戒め、理を尽くして当然を見極めよという同じような教えです。

3 貧<sup>ひん</sup>乏<sup>は</sup>づるに足らず。羞<sup>いやし</sup>づべきは是れ貧<sup>ひん</sup>にして志<sup>せんにく</sup>なきなり。賤<sup>せん</sup>悪<sup>にく</sup>むに足らず。悪<sup>にく</sup>むべきは是れ賤<sup>いやし</sup>しうして能<sup>おいなげ</sup>なきなり。老<sup>おい</sup>嘆<sup>なげ</sup>くに足らず。嘆<sup>なげ</sup>くべきは是れ老<sup>おい</sup>いて而<sup>お</sup>して虚<sup>きよせい</sup>生<sup>せい</sup>するなり。死<sup>し</sup>悲<sup>ひ</sup>しむに足らず。悲<sup>ひ</sup>しむべきは是れ死<sup>し</sup>して聞<sup>き</sup>くなきなり。  
(修身)

(意識) 貧乏だからといって別に羞じるに足らない。羞づべきは貧乏に負けて志をなくすることである。地位や身分が卑しいからといってこれを悪むに足らない。悪むべきはそのために何の能力もないことである。年をとったからといって歎くに足らない。歎くべきは、老いて生きるべき道を聞けずに虚しく生きることである。己自身が死ぬことも悲しむに足らない。悲しむべきは死んで道を聞くことができなくなることである。

(余説) 老いるということは生の後に当然続くものです。それは春夏秋冬と同じでごく自然のことにすぎません。しかしそれだけ年季をかけるのですから、老耄ではなくて、老熟して生が充実させることは大切です

死ぬということも生あるものは必ず死ぬのですから、自分自身において本来悲しむべきことではないはずです。上の意識は安岡正篤<sup>まさひろ</sup>氏の解釈です。氏は論語の「朝に道を聞く、夕に死すとも可なり」(里仁8)も挙げて「道を聞くことくらい楽しいことはない」とその解釈を強調しています。疋田啓祐<sup>ひきたけいゆう</sup>氏は「悲しむべきは、死んで名を残さないことである」と解釈していますが、あなたはどちらを支持しますか。

「悲しむべきは是れ死して」の後の「聞く」が「補い」となっていて「死期世の中に役立つことを残さぬこと」となっている本もあります。

4 童心は最も是れ人となるの一の大病<sup>たいへい</sup>なり。ただ童<sup>おん</sup>心を脱<sup>だつ</sup>すれば、便<sup>べん</sup>ち是れ大人君子なり。或る人之れを問ふ。曰く「凡そ炎熱<sup>えんねつ</sup>の念<sup>ねん</sup>、驕<sup>きょう</sup>矜<sup>きん</sup>の念<sup>ねん</sup>、華美<sup>けいび</sup>の念<sup>ねん</sup>、速<sup>すみ</sup>やかならんと欲<sup>よく</sup>するの念<sup>ねん</sup>、浮薄<sup>うはく</sup>の念<sup>ねん</sup>、声<sup>せい</sup>名<sup>めい</sup>の念<sup>ねん</sup>は、皆<sup>みな</sup>童心也」と。  
(存心)

(意識) 童心は一人前の人間になる時に乗りこえなければならない、最も大きい病である。ただこの童心を脱してしまうと、大人・君子となるのである。ある人がこれについて質問した。それで「一般に、燃えるような強い欲望、おごり昂ぶる気持ち、華美を尽くそうとする思い、すぐにそうしたいという気持ち、軽薄な考え、名誉に対する欲望などは、みな童心から生まれるのである」と答えた。

(余説) これは当時風靡していた李卓吾<sup>りたくご</sup>(1527-1602、中国明代)の誰もが持つ偽りのない真心を大切にする「童心説」への批判です。李卓吾は既成儒学や当時の道学者を批判しましたが、狷介な性格のあって世と相容れず、捕らえられ獄中で自殺しました。死後も弾圧は止まず、著作やその出版の版木は全て遺棄されました。

しかし現代の世相では、それなりの立場にある人々が全く童心から抜け出ていないと感じられることが多くあり、李卓吾の気持ちも分かる気がします。

幕末越前藩の志士で安政の大獄に連座し刑死した橋本左内の著「啓発録」の第一章が「稚心<sup>ちしん</sup>を去る」です。「何によらず稚といふことを離れぬ間は、物の成り揚がる事なきり」「稚心除かぬ時はいつまでも腰<sup>さむらい</sup>抜け士になり居り候もの」とあります。一方、良寛や湯川秀樹が老年まで保持したと伝わる童心は「超童心」とでも言えるものでしょうか。